

平成29年度

第4回県大生・県大教職員の

創造力コンテスト

第21回

学生文芸コンクール

入賞作品集

主 催 静岡県立大学はばたき寄金運営委員会

目 次

○創造力コンテスト … 3

○学生文芸コンクール

・ 短編小説部門 … 7

・ 評論・エッセイ部門 … 30

・ 短歌部門 … 34

・ 川柳部門 … 35

第4回県大生・県大教職員の創造力コンテスト入賞作品

| 部門 | 受賞 | 名前 | 所属 | 作品名 |
|----------|------|-------|--------|--|
| 創造力コンテスト | 最優秀賞 | 山本 聖也 | 国際関係学部 | YouTube、Twitter等のSNSを活用した、模擬授業型広告モデルの提案 -草薙から世界へ- |
| | 優秀賞 | 中村 洸友 | 薬学部 | 拡散力を生かす。SNSで全国へ ～県施設を情報発信の拠点に～ |

第21回学生文芸コンクール入賞作品

| 部門 | 受賞 | 名前 | 所属 | 作品名 |
|---------|------|--------|------------|------------------------|
| 短編小説 | 最優秀賞 | 野田 侑希 | 国際関係学部 | Moon's Unrequited Love |
| | 優秀賞 | 澤野 華世子 | 国際関係学部 | デイジー |
| | 佳作 | 原川 真緒 | 看護学部 | 秋待ち |
| 評論・エッセイ | 努力賞 | 松井 杏美 | 国際関係学部 | 原因と結果 |
| 短歌 | 最優秀賞 | 澤野 華世子 | 国際関係学部 | 秋と君 |
| | 優秀賞 | 田部 美紗子 | 薬学部 | 懐古 |
| | 優秀賞 | 小林 勇太 | 薬食生命科学総合学府 | 内定ゲットだけ |
| | 佳作 | 田部 美紗子 | 薬学部 | 群青の日 |
| | 佳作 | 青柳 有紀 | 薬学部 | 木曜午前零時 |
| | 佳作 | 山本 奈央 | 国際関係学部 | 健康長寿の秘訣 |
| | 努力賞 | 山田 朋宏 | 薬食生命科学総合学府 | 頑張る |
| 川柳 | 最優秀賞 | 山本 奈央 | 国際関係学部 | 成績評価平均値 |
| | 優秀賞 | 工藤 悠翔 | 薬学部 | 就職面接 |

| | | | | |
|------|-----|--------|------------|------------|
| | 優秀賞 | 山田 朋宏 | 薬食生命科学総合学府 | 就活 |
| | 佳作 | 進藤 卓弥 | 薬食生命科学総合学府 | インスタ女子 |
| | 佳作 | 石橋 未来 | 薬学部 | 学校生活 |
| | 佳作 | 長谷 怜奈 | 薬学部 | 坂登る |
| | 努力賞 | 小林 勇太 | 薬食生命科学総合学府 | 友達の家 |
| イラスト | 佳作 | 澤野 華世子 | 国際関係学部 | 秋の調 |
| | 佳作 | 有村 歌織 | 国際関係学部 | 県大生 全員集合!! |
| | 努力賞 | 中村 千紗都 | 薬食生命科学総合学府 | 氷解 |
| | 努力賞 | 中川 篤毅 | 薬学部 | コホちゃん |
| 写真 | 佳作 | 玉舟 亮太 | 薬学部 | 流る |
| | 佳作 | 川田 久美子 | 食品栄養科学部 | 行楽日和 |
| | 佳作 | 菅野 真伎 | 食品栄養科学部 | 氷雨に咲く |
| | 佳作 | 山田 朋宏 | 薬食生命科学総合学府 | 想いを込めて |
| | 佳作 | 武田 真奈 | 薬学部 | 涼をとる |
| | 佳作 | 大平 裕也 | 薬学部 | 情熱 |
| | 努力賞 | 小林 勇太 | 薬食生命科学総合学府 | 聖杯に祈るのは |
| | 努力賞 | 柳田 洋翼 | 薬食生命科学総合学府 | 空からの朝焼け |
| | 努力賞 | 山本 健太 | 薬学部 | 白一点 |
| | 努力賞 | 杉本 光輝 | 薬学部 | スポットライト |
| | 努力賞 | 上田 一樹 | 薬学部 | 時の回廊 |

YouTube、Twitter等のSNSを活用した、模擬授業型広告モデルの提案
—草薙から世界へ—

はじめに

本稿では、本学教諭と広報室や静岡県立大学テレビ製作委員会が中心となり、YouTubeや、Twitter、FacebookといったSNSを用いて本学教諭の簡易的な模擬授業を配信することで、「開かれた大学」という本学のテーマを活性化していくためのモデルを提案する。

以下では、はじめに先行研究から若者の情報収集方法がSNSにシフトしつつあることを見て、10代のSNS利用率の高さから、SNSによる広報を進めることの重要性を確認する。次に、模擬授業をYouTubeで公開している大学があること、それらの動画の多くは10分以上のものが多く、先行研究からすると少し長すぎることを確認する。最後に、先行動画を参考にしうえで、本大学を広報するための模擬授業動画のモデルを提案する。

SNSで大学情報を発信する意義

総務省(2015)を見ると、SNSの閲覧や投稿といったサービスの利用率は、年代が若くなるほど上がっていることがわかる。10代が現在使用しているSNSを調査したMarketing Research Camp(2017)によれば、10代の情報収集方法に関して、「SNSの投稿やニュースコンテンツ」(69.2%)が「インターネット」(67.3%)を上回る結果となっている。また、10代若者が使用するSNSは上からLINE(88%)、YouTube(81%)、Twitter(75%)となっており、これらのSNSが若者の情報収集に積極的に使われていることがわかる。

大学選びに関する調査をしたネットエイジア(2014)を見ると、受験生が大学の情報を得る手段として、「大学のホームページを見て」が62.4%、「インターネット検索して」31.4%となっているように大学入試に関しても、ネットをベースにした情報収集が行われていることがわかり、これらのことから、SNSを用いて大学の情報を発信していくことの重要性が見て取れる。

模擬授業動画の現状と問題

ネットエイジア(2014)では、大学とはどんな場所かという問いに「興味のあることを学ぶ場所となっている」(72.7%)が最多となっている。また、進路情報研究センター(2016)によると、オープンキャンパスにおいて、模擬授業を重視すると答えた学生は1位の設備・施設(94%)に次いで全体の88%になっており、重要視されていることがわかる。これらのことから、具体的な学習内容を見ることのできる模擬授業の動画配信は、大学の特徴を広報する上で欠かせないものであるといえるだろう。

現在YouTubeには、東京大学をはじめとして早稲田大学、慶應義塾大学、一橋大学、お茶の水女子大学など、いくつかの大学が模擬授業をアップロードしている。公開されている模擬授業の多くは実際の講義を録画したもので、50分以上になるものが比較的多い。しかし、Ruedlinger(2012)によると、動画が10分を超えたものになると、半分以上のユーザーが動画の1/10程度を見た段階で視聴をやめてしまうことがわかっている。また、同研究をより細かくまとめたCurrier(2013)では、10分以内の動画であれば55%のユーザーが最後まで動画を見て、それ以降は最後まで見るユーザーが極端に減っていくという結果が示されている。

これらのことから、長くても10分以内に収めた模擬授業動画をつくるのが好ましいと思われる。

先行する模擬授業動画

参考として大谷大学と学習院大学の模擬授業動画を挙げる。大谷大学では、各学部、学科の教諭がそれぞれ自身の模擬授業に関して、主題とその大まかな内容を1~2分程度の短い説明をしている。こちらの動画は模擬授業のダイジェスト的な宣伝動画であるが、その授業で扱われる内容がコンパクトにまとめられておりどんな授業内容なのか想像をかきたてるものとなっている。参考文献

に付した動画では、教諭がエレキギターをもったまま説明をしており、視覚的なインパクトにより視聴者の興味喚起がされているとも言えそうだ。この形式の動画は、あくまで模擬授業そのものではなく、情報量がやや少ないことが欠点であるといえる。

学習院大学の模擬授業動画は、実際の授業の様子を、細かくカットを入れたり、専門用語の説明をテロップで表示することで大幅な時間短縮を図っており、約15分の間に議院内閣制と大統領制についてや、内閣の役割、世襲議員についてなど、一般的な90分の授業よりも遥かに多い情報量が詰め込まれている。冒頭の「世界中のリーダーの中で一番力が強い人って誰だと思いますか？」という問いかけで視聴者をひきつける工夫もされているようだ。こちらはトピックが複数に渡った故に少し時間が長くなってしまっている。常に講演者を映しており、資料などがあまり示されない点も改善の余地があるといえよう。

モデル提案

上記の動画を参考に一つのモデルを提案する。長さは10分以内を目安として、最初の数秒で、視聴者の注意を引くようなトピックを示す。以下につづく講義では、編集でもカットを重ね、板書や資料準備による間を作らないようにし、時間短縮を図る。また、パワーポイントやテロップ、図の挿入などを活用し理解を促進する。テーマによってはBGMやSE(効果音)をつけるなどして与える印象を調整する。他大学の模擬授業動画の多くは実際に行われた講義を撮影したものが殆どであるため、こうした手法によって、テレビ番組のような視覚的、聴覚的效果に溢れる授業動画を作ることができ、他大学の模擬授業動画との差別化も図ることができると思われる。

以上、先行研究や、他大学の模擬授業動画を参考に、模擬授業型広告動画モデルを提案した。現段階では具体的な授業内容は示せておらず、実際に動画を作成するとなった場合、基本的には授業をする教諭が、製作側とのやり取りの中で動画のための模擬授業を組むことになり、両者に大きな負担が生じることが予想される。しかしながら、YouTubeなどのSNSをはじめとして、Web上において情報を発信していく必要性が、情報化社会の成熟に従って増していくことは間違いない。まだ模擬授業動画を公開している大学が少ない今だからこそ、積極的に動いていくことが、“開かれた大学”をより本質的なものにする第一歩になるといえるのではないだろうか。

参考文献

- Currier Alyce (2013)『Longing for Longform』
<<https://wistia.com/blog/longing-for-longform>>2017.10.05参照
- 学習院大学(2015)『なるほど！模擬講義・法学部政治学科』
<<https://www.youtube.com/watch?v=p2M0i8imlaE>>2017.10.05参照
- Marketing Research Camp(2017)『モバイル&ソーシャルメディア月次定点調査』
<<https://marketing-rc.com/report/report-monthly-20170510.html#free-download-h3>>2017.10.05参照
- ネットエイジア(2014)『大学選びに関する調査2014』
<http://www.mobile-research.jp/investigation/research_date_140724.html>2017.10.05参照
- 大谷大学(2015)『国際文化学科【廣川准教授】』
<<https://www.youtube.com/watch?v=iAh3BItlex4>>2017.10.05参照
- Ruedlinger Ben(2012)『Does Video Length Matter?』
<<https://wistia.com/blog/does-length-matter-it-does-for-video-2k12-edition>>2017.10.05
- 進路情報研究センター(2016)『進路情報研究センター調査レポート Vol.12』
- 総務省(2015)『社会課題解決のための新たなICTサービス・技術への人々の意識に関する調査研究』
<<http://www.soumu.go.jp/ihotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/n2200000.pdf>>2017.10.05参照

拡散力を活かす。SNSで全国へ
～県施設を情報発信の拠点に～

静岡県立大学薬学部2年 中村洗友

<提案>

静岡県の所有の施設から、県立大の情報を発信できないか。
見た人がSNSでその情報を拡散することで、大人数の人に情報が届くことを目指す。

<背景>

① SNSの活用について

Twitter、Instagram、FacebookをはじめとするSNSが広まってきている

↓

近年、SNSで「個人」が流行を作っていく時代へ。興味を引くことを個人が発信する。

② なぜ、県の施設なのか。

大学の情報は、研究者や大学関係者以外にあまり見られることはない。身近な存在ではないと考えられる。静岡「県立」大学ということで、県所有の施設とコラボして情報を届けていくことはできないのかということ考えた。

<このような想定しています>

静岡県庁別館21階展望室 富士山展望ロビーなど→静岡ならではの食の発信

展望ロビーは駿府城公園に近く、静岡の観光名所となっている

たとえば、展望ロビーで「イズシカめんち」の紹介があれば、食事の候補へ。珍しい食材では、写真を撮って、SNSに掲載されることも多くなるだろう。魅力的なものであれば、それを見た人が、それを食べに来ると考えられる。



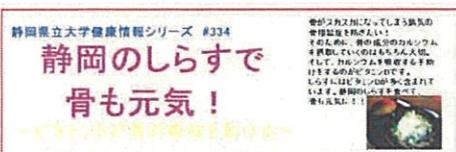
投稿を見て



イズシカめんちを
食べてみたい！
調べてみたい！

県総合運動場、小笠山総合運動公園→健康に関する情報

静岡県所有のスポーツ施設にはトレーニング室などでは、本格的に競技をする人の他にも、健康のための運動をしている人も多い。健康のための運動は、静岡の健康長寿にも寄与しているのだが、医療の健康情報（食事についてなど）があれば、さらに健康への効果が高まる。役に立つ情報は拡散が期待される。



しらすは骨を
守るのにいい
んだね！

それなら今度、
食べに行きま
しょう！



他にも県の施設としては県立美術館やグランシップなどがあり、大学の学部も薬学部、食品栄養科学部、看護学部、経営情報学部、国際関係学部、短期大学があるので発信できる情報については多彩である。

<これまでの似た事例>

近畿大学～近大マグロ

近畿大学水産研究所がマグロの完全養殖に成功したことから。マグロを強調したわかりやすい広告で、近畿大学といえばマグロというイメージを定着させている。



金城学院大学～『車内の金城大学』シリーズ

興味を引くタイトルでつい読んでしまうような生活コラムのシリーズ。電車の広告として掲載されている。専門でない人にも、研究していることの内容が理解しやすいようになっている。



例に挙げた事例は「広告」として、公共交通機関や新聞といったところで展開されている。

もちろん、直接的にその広告を見た人が印象に残るというのもあるが、これらの広告は「誰かに面白さを教えたい」とも思わせ、SNSで拡散されたことで広がるものであると思われる。特に近畿大のものは、SNSがなければ、ここまで全国に知られることはなかったはずだ。

もちろん、静岡県立大が発信すべきことが、これらのものと同じことではないし、広告として街で出していくのであれば予算などの問題もあり、簡単にできることではない。

そこで、県の施設とコラボして、施設に関連した情報の発信がすれば、静岡県立大の強みを生かした広報ができるのではないかと考えた。施設にとっても、情報発信の場としての機能が定着すれば、もともとの施設の設備に加えてさらに「県のための場」としての価値は上がり、メリットがあると思われる。工夫した内容で、SNSを通して話題になれば、施設自体の集客にもつながる。現状では、それぞれの施設が独立して活動している施設が多いのだが、県の資金で運営している機関として、協力し合えば、相乗効果を生み出して県民のためになっていくことが期待できるのではないだろうか。

<最後に>

大学にはそれぞれの分野の専門家が在籍している。大学で学んでいたり、研究していたりする人にとっては常識といえるような内容であったとしても、世間にはあまり知られていないということは少なくない。「静岡県立大学構内」にまで足を運ばなくても、静岡県立大学発の情報を広げるきっかけとなるような場所、そして広めたいようなコンテンツ。それがあれば、静岡県立大学の研究や取り組みがさらに全国に知られるようになる、『情報がはばたく』状況が生まれていくと考える。

<写真等の引用>

Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/静岡県庁舎>

静岡県立大学ホームページ <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/cooperation/collaboration/achievement/>

エコバスタジアムホームページ <https://www.ecopa.jp/facilities/stadium/>

ハローナビしずおか <http://hellonavi.jp/search/index/result?mode=food&shizuokaSpec1=40103>

近畿大学ホームページ <http://www.kindai.ac.jp/archives/2012.html>

短編小説部門 最優秀賞

「Moon's Unrequited Love」

国際関係学部 野田 侑希

1 かぐやのはなし

わたしの記憶は、夢から醒めて何の夢を見ていたのか思い出せないような感覚と似ていた。でも、懐かしくどこかさみしいという気持ちだけは覚えていようなそんな感じ。

こんな気持ちを抱えながらわたしはぼんやりと過ごしていた。なぜかわからないがわたしの記憶は一部しかない。「かぐや」という自分の名前とここに来てからの記憶だけ。ここというのはCafe Lunaのことで、このカフェから流れてくる音楽に導かれるようにして、みかどに出会ったのだ。

「いらっしやい」

そう言ったみかどの顔を今でもよく覚えている。鳩が豆鉄砲を食ったような顔というのはああいう風な顔なのだろう。そんな顔から一転、悲しげな顔をして

「お好きな席におかけください」

と言った。不思議に思ったが、その時は人にはいろいろな事情があるのだろうと思ひ尋ねなかった。今思えばあの時、わたしは尋ねておくべきだったのだろう。(それを聞いていたからと言って結末が変わるとは思わないけれど。)だが、わたしはそれよりも先に聞きたいことがあったのだ。記憶の手がかりの尻尾は何としても離すわけにはいかなかった。

「先ほど流れていた曲は何の曲ですか？」

「ドビュッシー作曲ベルガマスク組曲第三曲目の月の光という曲ですよ」

わたしはその答えに驚いた。確かに、わたしはこの曲から懐かしきときみしきを感じていた。だがしかしその曲名ならば、わたしの感じた懐かしきはありえないはずのものだと思う。地球はいま月と百年戦争の最中である。(もつともそう名がついたのは百年を超した去年からだっただが)月と名の付くものは規制され、曲であつても聞くことを許されていない。それが百年も続いているのだから、「月」と名の付く曲は忘れ去られ今ではほとんど存在しないのである。だからわたしがこの曲を知っていて、懐かしいと思うことはありえないはずなのになぜか懐かしいと感じてしまった。記憶について改めて考え直す前にふと疑問に感じた。

「なぜ月と名の付く曲を知っているのですか？というよりも弾いていたのがあなたならばつかまつてしまいますよ！」

「この曲は彼女が好きだった曲なんだ…あと僕は捕まることはないから心配しなくても大丈夫だよ。こうみえても地球軍の技術者だからね」

地球軍とはその名の通り地球側の軍隊であるが、その実態は不明である。確かに存在はするものの、掴むことができない霞のような組織だった。そして全く情報がないことから、地球軍の話を漏らした者は消されるなどの噂が流れるほどであった。そんな謎の組織の話をやおら話されたりしたら、ちよつとしたことくらいでは驚かないわたくしだつて驚く。

「そんな話をわたしにしてしまつて大丈夫なのですか？」

「つい君が彼女に似ていたから話してしまつたよ。でも君ならだれかに吹聴してまわることなんてしないだろう？」

「まるでわたしを知っているような物言いですね」

彼の言い方に馴れ馴れしきを感じて少しむつとした。それこそ、わたしを通してその「彼女」と話をしているかのように感じてしまつたのだつた。でも、むつとはしたものの、その馴れ馴れしきにもさつき曲を聴いたときに感じたものと同じものを感じたのだつた。

2 みかどのはなし

僕は地球軍の技術者だった。「だった」というのは間違いで今もそうなのだけど、現在は休職中なのだ。軍ではヒューマノイド作戦に関わっていた。ヒューマノイド作戦とは、見た目が人間とほとんど変わらないヒューマノイドを月へ送り込み、諜報などを行わせるというものであった。僕はそのヒューマノイド作成のメンバーとして招集された。彼女もまたそのうちの一人として招集され、僕たちは出会った。

「こんにちは、私は瑠奈というのよろしくね」

「僕はみかど、よろしく」

はじまりなんてあっさりとしたものだった。共同で研究を進めていくうちに親しくなり、瑠奈の家に行った。驚いたことに瑠奈の家は月に溢れていた。代々瑠奈の家は月を研究している家系だそうで、研究資料として月に関する物の所持が認められていたようだ。その中には現在は規制され見かけなくなつた「月」を題に含む曲の譜面もあった。

「私この曲が好きなの、でも自分じゃ弾けなくて」

「僕が弾こうか？」

「ほんとに！この曲よドビュッシーの月の光」

弾いて、聴こえてきたメロディーはどこかさみしげで美しいものだった。

「この曲はね、ドビュッシーが片思いしていた人妻のために作つた曲と言われているの」

僕がこの曲に抱いたものは、人妻うんぬんを抜きにして、どうしても伝わらない思い、まるで宇宙で声を張り上げて声は出さず、ただただ広く暗い宇宙に一人取り残されてしまった諦めのような感覚であった。感じ方は人によって違うのかもしれないが、僕にとって一番しっくりくる表現はこれだったの

だから仕方がない。

「僕に似ているな」

「え？何か言つたかしら？」

「何もないよ、独り言」

彼女の家でこのような会話をしてから数日後、研究所は月軍に襲撃された。その時に彼女は月へ連れ去られた。彼女が連れ去られた後、僕が感じたのは月の光を聴いたときに感じた感覚と同じものだった。

瑠奈を失つてから、研究施設の破損と人員不足によりヒューマノイド作戦は一時的に凍結された。

そして現在に至る。あの日突然、かぐやが店に訪れたときは瑠奈が帰つてきたのかと思つた。長い黒髪に白い肌、黒目がちな瞳はまさに瑠奈そのものだったのだから。でも実際はそうではなくて、月の光も知らなければ、僕のことも知らなかった。そしてどことなく彼女よりも幼く感じた。話を聞いてみるとこの子はどうも記憶がないらしい。記憶はないけれど、さつき僕が弾いていた月の光をとて懐かしく感じたようだった。僕もなぜかわからなければ、この子を引き留めたい気持ちにかられた。おそらく瑠奈にそっくりだったからなのだろうけど、ここで働かないかと声をかけてしまった。

「アルバイトということですか？」

「そういうこと、家もわからないならばらくうちに住み込みで働いたらいいよ」

「…そうですね、お世話になります」

「それじゃよろしく」

「こちらこそ」

少し悩んだようだったが、うちに住み込みで働いてくれることになった。

実際、うちで働いてみるとかぐやは想像以上にドジッ子というものだった。グラスを割ったり、掃除中にバケツにつまづいて転んだり、あらかたの失敗はし尽くしたと思う。でも、その度に次は失敗しないように努力する姿があった。その姿を見てみると、何事もそつなくこなすタイプだった瑠奈とは違うということがよくわかった。きっかけはかぐやが瑠奈に似ていたということだったけれど、今は違う。

「ああ、この子は見た目や雰囲気は似ているけれど瑠奈とは全くの別人なんだなあ」

こんなことを考えながら、次第にかぐやという存在に惹かれていった。

3 ヒューマノイド

かぐやがうちの店で働いてくれるようになって数か月が過ぎ、おさまっていた月の攻撃が激しくなってきた。そうして最近では、中心部から離れたこの町にも攻撃の手が伸びるようになった。ある日、かぐやに買い出しを頼んだところ数時間たっても帰ってこず、連絡もない。子供のお使いじゃないんだから、そこまで心配することはないだろうとわかってはいるものの、嫌な予感がした。もし何かあったらと考えたその瞬間にいつの間にか店を飛び出していった。どれくらい距離を走ったのだろう。

予感的中してしまった。

市場があつたはずの場所は跡形もなくなっていた。僕はかぐやを探した。辺りを走り回って1キロほど離れた場所がかぐやを見つけた。

「大丈夫か？」

意識があるか確かめるために肩をたたきながら声をかけた。

「みかどさん」

何とか意識はあつたようだ。僕は安心して、ようやく周りの状況に目がいった。足元に広がる黒いしみは自分の汗だということ、そしてその黒いしみのなかに小さな部品が散乱していることに気が付いた。

「みかどさん、腕の感覚がないです…」

聞こえた小さな声から、やつと状況を把握することができた。かぐやの右腕は吹き飛ばされてなくなっていたのだ。しかしその箇所から流れ出るはずのものはなく、地面に広がるしみは自分の汗によるものだけである。この状況が意味するものは何か？自分にはそれがすぐわかってしまった。つまり彼女はヒューマノイドだったのである。ついに意識がとぎれたこの子を誰の目にもつかぬよう急いで店へと連れ戻った。

「ヒューマノイド…だとしてもこの子を作ったのが僕ではないとしたら作れるのは…」

そう考えて、いや考えなくても分かることだった。この子を作ったのは瑠奈だ。月に連れていかれた瑠奈が作ったヒューマノイドならば、この子は月の軍に派遣されたのだろう。要は敵だ。しかし僕には、かぐやを地球軍に引き渡すなんて考えは一切浮かんでこなかった。既にかぐやは、瑠奈に似た女の子ではなく、かぐやという個として僕の中に存在していたのだ。かぐやの存在を失ってはならない。そう思い自分でかぐやを治すことを決意して、修復に取り掛かった。腕はなまっていなかったように思いのほかすぐに治すことができた。意識を取り戻したかぐやに対して事実をいうのは酷なことだったが言わなければならないことと、聞かなければならないことがあつた。

「かぐや、言わなければいけないことがある。君は人間ではなくヒューマノイドだ」

「え？ヒューマノイド？ヒューマノイドってなに？」

「ヒューマノイドとは簡単にいえば人型ロボットだよ」

「それならわたしは人間ではないということ？」

「そうだ。以前僕が地球軍の技術者だということは話したことがあるだろ。そこで僕はヒューマノイドの研究をしていたんだ。だから君の怪我也も治せた。」

かぐやは、すっかり元通りになった自分の右腕を見ながら呟いた。

「確かにわたしの怪我は人間のそれじゃなかった。もうここにはいられないかな……」

この言葉を聞いて、頭の中で月の光のメロディーが聴こえた。ヒューマノイドだとしても僕はかぐやのことを大切に思っていた。まだ、あの時瑠奈に伝えることができなかつた気持ちも投影しているだけかもしれないけれど、今伝えなければ暗い宇宙の中に戻ることになる。

「ここにおいてほしい、一緒にいよう。きみは僕にとつて大切な存在だ」

「!?!?!わたしもみかどさんのことを大切に感じています。でもわたしのきもちは作り物かもしれない。わたしはヒューマノイドなのでしょう?」

「たとえそのきもちが作り物だとしても、僕の気持ちを信じてくれたらそれは本物になるよ」

「…信じます。きつとこれはわたしの、わたしだけのきもちだろうから」
僕たちはとても幸せだった。この時までには

4 地球軍

部屋の中が突然光で満たされた。開店準備をしていた私たちは目をふさいだ。地球軍が乗り込んできたのだ。みかどとわたしは抵抗したけれど、引き離され、わたしは地球軍の施設へと連れていかれた。どこからか、わたしがヒューマノイドであるという情報が漏れたらしい。私が連れていかれた施設では過酷な取り調べが行われた。質問ごとに答えられないとカラダに電流が

流された。何度目かの電気ショックでわたしがヒューマノイドであることを主観的に思い出した。これまでは客観的な事実から自分がヒューマノイドであると認識してきたが、主観的に思い出したことでヒューマノイドとしての機能も呼び起こすことができた。わたしには自らを一旦リセットし、仮死状態にする機能がある。この機能を使えば一定期間どのような外部刺激にも反応することはない。困った地球軍はきつとみかどに助けをもとめるだろうなんて考えていた。この考えは大筋では成功した。

わたしはこの作戦に賭けた。どうせこのまま捕らえられているのならば、少しでも希望がある方を選びたかったのだ。仮死状態中、わたしは自分のデータのなかをさまよっていた。わたしが作られた時のことを見ていたら、ひとつぼんやりとした記憶の正体がわかった。みかどと初めて会った時に聴こえた「月の光」のことである。この曲はわたしが作られたときにも聴いていたものだった。わたしを作ったマザーはこの曲が好きだったようだが、なぜかいつもこの曲を聴くとさみしそうだった。一度理由を尋ねたことがあった。

「マザーはなぜさみしい顔をするのにこの曲を聴くの?」

「私はこの曲が好きなのよ。この曲と同じくらい好きな人がいたんだけどね、昔弾いてくれたことがあったの。それを思い出してしまふのよ。」

この会話の後にマザーはわたしが作られた理由を話してくれた。

「あなたは地球と月の橋になるためにつくられたのよ。だからあなたには月からの使者という気持ちを込めてかぐやと名付けるわ」

そう言ったマザーの顔は見えなかった。もしかしたらマザーは私の作られた目的を薄々感づいていたのかもしれない。記憶にあるマザーの部屋はがらんとしていて、白く無機質な部屋の中でマザーの長い黒髪は悲しげに揺れていた。ここまで記憶を行き来したが、わたしは最後までマザーの顔を思い出せ

なかった。場面は変わって月軍指令室、そこでの記憶はひどく残酷なものであった。いよいよ地球へ送り出される際に告げられた任務はただのヒューマノイドにとってはできたかもしれないが、「わたし」には遂行することができないものだった。

「地球軍のヒューマノイド研究者を消去せよ」

そう言った彼らの目は何の感情もうつしてはいなかった。ひそひそと「わざわざあの女に似せて作らせたんだからなあ」「あちらからヒューマノイドを送り込まれるようになったら月の結末が揺らぎかねないからなあ」などと聞こえてくる。なるほどわたしはマザーに似ているのか、などと冷静に考える一方で、わたしの基盤データはギシギシと音をたてて熱を持っていた。

「似せたのは外見だけじゃなかったのか」

そうつぶやくと同時に、夢を見るように見てきた記憶から、意識が急激に引き戻された。あたりは騒がしく、自分にはないもののおいがした。

5 二度目の宇宙

無理矢理かくやから引き離されて4日目、僕は地球軍の施設に收容されていた。反逆罪か、はたまた秘匿罪か、どのような罪状に処されるのかなどどうでもよかった。ただかくやに会いたかった。そのようななか急に施設から出され、違う施設へと連れていかれた。着せられている服は囚人には似つかわしくないほどの白。まるで幽霊だな、など移動中自虐的なことを考えていた。なるほど違う。あの子がいなければわたしはこの世に未練を残してさまよう彼らと同じようなものである。到着した施設は見覚えのある場所だった。月軍に襲撃された研究所…あの時の記憶がフラッシュバックした。ここから先は行ってはいけないと何か警鐘を鳴らしている。自分の意思でそれができるのなら、今すぐここから走り去りたい。だが意思とは反対に施

設の中へ歩を進めていく。なぜ連れてこられたのか疑問のままだったが、よくないことだということはいしひしと感じ続けていた。自らの研究室で目にしたのは動かなくなったかぐやだった。

「この子に何をした!」

僕は感情のままに叫んだ。体中の血液が心臓に流れ込んだように、鼓動は早くなっていた。「落ち着いてください」という周りの声など耳に入らず、なぜ?と考えた。そうか、彼らはこの子がこうなってしまったから僕をここに連れてきたのか。僕ならこの子を治せるかもしれないから、彼らも僕も、かくやを治すことはどちらにとってもメリットなのだ。思惑は違えども、目的は一緒だから僕が逃げることはないかと踏んで連れてきたのか。この子をこのようにした彼らに怒りはあれど、まずは検査するのが先だ。目、耳、鼻と人間の五感を調べるように順に検査していく。No Response No Response No Response 計器にはその文字が並んでいく。次、次、次と調べられる箇所はすべて調べた。No Response No Response No Response と文字が並ぶ。計器が壊れているのかと思った、そうではない。そうでなければ何なのだ?僕がおかしくなったのか?なぜなぜなぜ?頭の片隅に分かっているが、認めたくない事実が一つだけあった。

かくやはもう動かない…

認めてしまえば、この世界は私には意味のないものになる。先ほど考えていた自虐的な考えが頭をよぎった。認めるわけにはいかない。もう一度、すべての検査をしたが反応は一つとしてなかった。

「ああ僕はまた失ったのか」

いくら声を出しても届かない宇宙に戻ってきてしまったのだろう。自分のことなのにわからない。まるで自分のここからだが切り離されてしまった

服と、彼女の白い制服、白い研究室、そこに広がる黒は月のマザーの部屋で見た風景と重なった。彼の気持ちははじめから彼女にあって、彼女の気持ちはもまた彼にあった。結局見た目も、こころもすべて借り物、わたしのものなんて初めから何一つなかったんだ。今までの感情もすべて嘘だったのだと思つた途端、笑いが込み上げてきた。私は声をあげて笑った。月軍に連れられ月へと戻る道程も笑い続けた。

私とそのオルゴール店に足を運ぶようになったのは、冬が終わって、町の空気が春を迎える準備をし始めた頃の、数か月ほど前からだった。

初めて足を運んだきつかけはもう思い出せないが、おおかた進めていた小説の翻訳の仕事が煮詰まって、気分転換に出かけた先に見かけたから入ったとか、そんなものだろう。とにかく、オルゴールそのものに興味があったわけではなかった。そんな店が自分の住む町にあることさえ、知らなかった。そのオルゴール店は町のはずれにあり、店の佇まいはノスタルジックな雰囲気を感じ出していた。店の窓には、フクロウ、猫、バレリーナなどの陶器の置物がずらりと並び、窓の向こうをじっと見ていた。入口の左側にはアンティークな小さい時計台や洋燈があり、どことなくフランスの凱旋門を思わせる門の上には、店の名前をあしらった看板が堂々と正面を向いていた。ドアノブは馬の蹄鉄を模した造りになっており、それを握ってドアを開けてみたくて仕方ない気持ちにさせるような、魅力的な形をしていた。しかし、洋風の小洒落た見た目とは裏腹に、「どうぞ私のことなど気にしないで下さい」とでも言いたげな、どことなく少し遠慮がちな雰囲気を感じさせた。

店内の雰囲気も外観同様に、様々な種類のオルゴールが綺麗に陳列されているにも関わらず、どこかひっそりとしていた。普通の箱のタイプのオルゴールはもちろん、フォトフレームに埋め込まれた形のオルゴール、陶器で出来た人形の形、ピアノの形など、大小問わず様々な色や形のオルゴールがあるものは窓際に置かれていたり、またあるものはガラスのむこうの陳列棚の中（おそらく高価なオルゴールなのだろう）におとなしく鎮座していた。外から見た窓際の陶器製の置物も、おそらくオルゴールだったのだろう。

店内に入って右側の棚には、美しいデザインの箱のオルゴールがいくつか置

いてあった。蓋が開いたものもあり、蓋の裏側は鏡になっていた。棚の隅には「曲目一覧」と書かれた紙が貼ってあり、花のワルツだとか、パッヘルベルのカノンだとか、誰もがよく知っているような曲がほとんどだった。

ふと視線を上げると、目の前に「象嵌細工」と書かれた札があり、傍らには象嵌細工についての解説が書かれたプレートが置いてあった。

「象嵌細工」…デザイン画に沿って、異なった種類の木片を切り分け、それををまるでパズルのように、色目木目を考えながら、厳密に寄せ合わせ、一つのモチーフ「絵」を完成させる技法。古くは150年以上前のアンティークオルゴールの時代から華麗な音楽を奏でるオルゴール・ケースの表面に繊細な象嵌加工の、優れた模様が施されておりました。…」

「お気に召した商品はございましたか」

象嵌細工のプレートを読んでいたわたしは、突然背後から声をかけられてひどく驚いてしまった。その拍子に、象嵌細工のオルゴールが置かれた机がぶつかり、オルゴール同士がぶつかってガシャンと音をたてた。

「ごめんなさい、驚いてしまいました」

「いえ、こちらこそ突然声をかけてしまってすみません。大丈夫ですか」

「ええ…」わたしは衝撃で傾いてしまったオルゴールを元に戻した。損壊はないようだったので安心した。

男は、目の前の作業室から出てきたようだった。ピンクのストライプの入った、清潔感のあるワイシャツの上に、緑色のエプロンをつけていた。おそらくこの店の店主なのだろう。作業室は象嵌細工のオルゴールのスペースの横にあり、窓はガラス張りで中が覗けるような造りになっていたが、象嵌細工の説明を読むことに集中していたので男に気付けなかった。

「視線を感じたと思ったのですが、説明のプレートを読んでいたのですね」

「はい。綺麗な模様ですね。螺鈿細工みたいで」

「オルゴールは、好きですか」

彼は小さく笑って、わたしに尋ねた。

「ええ、好きです。とつても」

わたしは答えた。

「小さいころ、祖母にもらったオルゴールをよく聴いていました。木製の、ちようどこれくらいの大サイズの寶石箱で、内側がビロード生地になっているんです。当時はお祭りで買ってもらったおもちゃの宝石や指輪をしまっていたんですが、開くたびに流れるメロディが綺麗で、好きだったんです。この小さな箱の中に小人が住んでいて、あなたのために音楽を奏でてくれているのよって言われたのをずっと信じていたのを憶えているわ。大人になった今でも、本当にそうだったんじゃないかって感じるんです。こんな小さな箱から、あんなにきれいなメロディが流れ出すなんて、魔法みたいだつて」

一呼吸おいて、わたしは小さな声で言った。

「オルゴールを聴く機会は、もう少なくなってしまったのだけれど」

彼はそばに置いてあった、独特の形をしたオルゴールたちのひとつを手に取り、ぜんまいを回してくれた。にぎやかな曲だったが、どこか単調で、気の触れたニワトリが踊っているような曲だった。

「うちの店のオリジナル・オルゴールなんです。この曲はご存知ですか」

「分からないわ。なんていう曲？」

彼は曲名を覚えてくれた。わたしの耳にしたことのない曲名だった。

オリジナル・オルゴールはそれぞれ違う曲が入っているようで、彼はいくつか手に取り、ぜんまいを回してわたしに聴かせてくれたが、どれも聴いたことのない曲ばかりだった。

彼は次に窓際に置いてあった、陶器製の人形のオルゴールに手を伸ばした。ほっそりとした手足が印象的な人形だった。きつとわたしのオルゴールの中

にいた小人は、あんな風な細い手足を持っていたんだろうと思った。細い指でなければ、あの小さなオルゴールのぜんまいは回せない。

「わたし、この曲は知っているわ。ラヴェルのボレロね。フランスの作曲家だわ」

わたしは初めて自分の知っている曲が流れたので嬉しくなった。彼は笑って頷いた。

「フランスの曲には、お詳しいのですか」

「家にもって一日中フランス語と向き合うのがわたしの仕事だから、たまにフランスのクラシックレコードも聴くのよ。ドビュッシー、ビゼー、グノーとか、色々」

「何のお仕事ですか？」

「フランス語の翻訳家。辞書をめくって言葉を探す仕事よ」

「素敵なお仕事ですね」

「素敵なんかじゃないわ。今、わたしの家の机上で、ピアニストの男と作家の女が幸せそうに同棲生活を始めたところなの。わたし、誰かと同棲なんてしたことがないから、イメージが湧かなくて訳すのも大変だわ」

わたしは書きかけの翻訳原稿を思い出した。フランスの現代作家の、作家のピアニストの恋愛小説を翻訳している真つ最中だった。

「人の手から、こんなにきれいな音楽が流れる箱を作る仕事の方が、わたしにとつてはずつと素敵。現行の合間の、いい息抜きになったわ」

「ありがとうございます」

彼は感じのいい笑みを浮かべて、わたしにお礼を言った。

その日から、わたしは原稿の合間にオルゴール店に足を運ぶようになった。

店内はいつも彼一人が作業室にいるだけか、数人の客が店内をうろついていたが、何かを買っていく様子は見受けられなかった。わたしも何かを買いに

店に行っていたわけではなかったが、それでも彼はいつでもわたしを温かく迎え入れてくれるようになった。

*

その日は、まるで鋼が降っているかのような、強い、強い雨でした。持ち主がいなくなつた部屋のピアノは、居心地が悪そうに、部屋の隅に縮こまっています。

彼が海外で演奏会をするために出国してから三日は経つたでしょうか。カレンダーを見ても、彼がいつ出発して、いつ戻ってくるかのメモはありません。彼の演奏会はもう終わったでしょうか。いつまで経つても次の作品が書けない私とは違って、彼はきつとスポットライトの下で見事な演奏を聴衆に聴かせ、たくさんの拍手を貰つてきたのでしょうか。彼は単なる優秀なピアニストであるだけでなく、人望も厚く、多くの人に好かれる目をしていることを私はよく知っています。彼は私のように、原稿用紙の一枚も埋めることができるわけでもないのに、何故そんなに大衆から好かれるのか・・・私には分かつていません。その事実が、私に何の才能もないことを、よく理解させてくれるのです。私はひどく惨めな気持ちになりました。

ふいに、「向こうにいたら連絡をちょうだいね」と言つた自分の言葉を思い出しました。彼が家を出る際に、私が彼にかけてた唯一の言葉でした。しかし、彼から連絡はなかったのです。

私は深いため息をつきました。

冷蔵庫を開けると、数日前に買ったキャベツが目に残りました。キャベツは葉の先端から腐敗が始まっています。私はそれを手に取り、一枚ずつむしりながら、ゴミ箱へ捨てていきました。雨の音はますます強くなってきました。.....

*

わたしは今日の分の小説の翻訳が終わると、原稿用紙を束ねて、上に文鎮を置き、電気スタンドのスイッチをオフにした。

今進めている原稿は不穏な空気を迎えていた。女作家はピアニストの男の才能を妬みはじめ、同時に自身の作家としての才能のなさを、ピアニストを通じて実感し、苦悩していくようになっていった。

わたしは長時間机に向かつて原稿を進めていたため、腰の痛みと目の疲れを感じ、上着を羽織つて外に出た。空はどんよりと曇っており、今にも雨が降りそうな気配だった。

店についたとき、店内の様子がなんとなくいつもと違うことに気が付いた。窓際に並んでいた陶器製の置物たちは、どことなくよそよそしさを感じさせ、棚の上に優雅に舞っていたバレリーナのオルゴールも、今日はどこか寂しげな空気をまとっているような気がした。

「やあ」

彼が奥の台所から顔をのぞかせた。やかんの沸騰する音が彼の後ろから聞こえた。

「なんとなく、きみが来るような気がしていたんだ。お茶をいれるから、そのイスに座って待っていてよ」

「来ると思ってた？こんな天気なのに？」

わたしが不思議に思つてそう返したが、彼は奥に引込んでカチャカチャとカップを扱っていた。わたしはイスに腰掛けて、彼がカップを持ってこちらに来るのを待っていた。

「おまたせ」

彼はカップを二つ持ってこちらにやってきた。いつものピンクのストライプのシャツに、緑色のエプロンをつけていた。彼はいつもと変わらないのに、この空間に感じる違和感は何なのだろうと、わたしはますます不思議に思った。

「実は今度、隣の少し大きな美術館の中で、オルゴールの展示会をするこ
とになったんだ」

彼は嬉しそうにわたしに話した。店内のオルゴールの数が少し減って、なんとなくもの寂しい感じになっていた理由を、わたしはそこで悟った。よく見てみると、展示用においてあったガラスの棚の中のオルゴールはみな姿を消していた。

「この展示会がうまくいけば・・・」

彼はそこで一瞬言葉を濁したのを、わたしは聞き逃さなかった。彼はつづけ
た。

「中心街でもっと大きな店を出せるかもしれない」

ねぎらいや励ましなど、わたしが今彼に言うべき言葉はたくさんあっただ
ろう。けれど、口をついて出たのは、「そう」とか「ええ」とか、意味のな
い言葉だけであった。

彼はわたしの言葉を待っているだろうか。わたしは彼と目すら合わせられ
ないまま、ただ黙って差し出されたカップに口をつけた。

「分からないの・・・」

カップから口を離し、彼から目をそらしたまま、わたしは口を開いた。

「時々、自分がどうして翻訳の仕事なんてしているのか、分からなくなるの。
きつと誰もわたしの訳した本なんて読まないだろう、って思うと、世界の縁
に追いやられたような、みじめな気分になるの。死人の言葉をなぞることが

本当にわたしのしたいことなのか、この行為になんの意味があるのか、分か
らなくなるの」

彼は黙ってわたしの言葉を聞いていた。

「あなたは、どうしてオルゴールを作っているの？作ったものを見てくれる
人がたくさんいるから？たくさんの人に見てもらいたいから？」

尋ねてからわたしは後悔した。彼がせっかく展示会の話をわたしにしてくれ
たというのに、わたしは自分の気持ちの柵を彼にぶつけて、彼の喜びを台無
しにしてしまったと思った。再び、沈黙が訪れた。わたしはカップをテーブ
ルの上に置き、身体をぎゅつとちぢこめるようにして坐りなおした。

「…音楽というものはね」

ふいに、彼が口を開いた。わたしは思わず彼の顔を見つめて、次の言葉を待
った。

「もうこの世にはいない人が残していったものがたくさんあるんだ。だから
といって、それらも作った人と同様に死んでしまったものではなくて、生き
ている時の彼らを、彼らの感じたものを追うことができるものなんだ」

彼は手元のオルゴールに視線を落とした。わたしも彼の手元を見つめた。

「だから、こうやって音楽を聴くのは彼らの棺を覗く行為じゃなくて、覗い
ているのは彼らの標本箱なんだ。そこに死臭なんてしない。わかるかい」

「標本箱？」

「そう。僕は、見えない彼らの標本箱を、オルゴールという形で可視化して
いるに過ぎないんだ。これは作家にだって、ピアニストにだって言えること
だと思ふよ。きみだってそうだろう？」

ひょうほんばこ、という単語をわたしは心の中でそととつぶやいた。ばら
ばらになっていたわたしの心の中の何かが、一つ一つ標本箱にしまわれてい
くようだった。

「きみだって、翻訳された本という一つの形の標本箱を作っている人間のひ

とりだよ。海のむこうの遠い国の、もういない誰かが残した言葉たちを磨き直して、綺麗に展翅していくのが君の役目だ」

彼はわたしの目をじっと見据えて言った。

それから、わたしの空のカップに目線を落とし、おかわりは？と尋ねた。わたしは首を横に振った。

もうすぐ夏が始まるというのに、その日の晩はいやに風の冷たさが肌を粟立たせた。

あの後、店を出て家に向かうまでは天気はもっていたが、夜になると打ち付けるような激しい雨が降っていた。

わたしは押し入れにしまい込んでいた毛布を取り出した。そのとき不意に、押し入れの奥に窮屈そうに物に埋もれているオルゴールを見つけた。彼に初めて会った時に話した、祖母からもらったオルゴール箱だ。

わたしは手を伸ばし、オルゴールを引つ張り出した。最後に蓋をあけたのはいつだったのだろうか、そのオルゴールは蓋が開かなくなっていた。金具のかみ合わせが悪くなっていたのだろう。あまり無理にこじあげようとすると壊れてしまいそうだったため、わたしはそれをテーブルの上に置いた。

このオルゴールはどんなメロディを聴かせてくれたのか、今ではもう思い出せなかった。おもちやの宝石も指輪も、働き者の小人も、今でもこの中にちやんとあるのだろうか。

「棺の中が死の匂いを漂わせているのなら・・・」

わたしは昼間の彼の言葉を思い出してつぶやいた。

「標本箱の中は、どんな匂いがするのかしら」

また彼の店を訪れた時は、彼は作業室で香箱と呼ばれるオルゴールの部品を組み立てている最中だった。

この作業は、以前にも一度見せてもらったことがあった。香箱は、オルゴールの動力である、ぜんまいを格納するためのゼンマイケースだ。オルゴールはぜんまいを巻いて、ぜんまいが戻る力で音楽を奏する仕組みになっているのだと、彼が教えてくれたのだった。わたしはこの作業をしている彼を見るのが好きだ。彼の指は、ひとつひとつが意志をもった生き物のように、器用に動き、香箱を組み立てていった。

「小人でなくても、オルゴールの部品を扱うことはできるのね」

彼の作業がひと段落したのを見て、わたしは言った。

「もちろんさ。僕にだって出来ているんだ、きみにだってきっと出来るよ。君の指は僕よりずっと細いから、向いているかもよ」

彼はわたしに香箱を差し出して見せた。わたしは首を振って答えた。

「できないわ。わたしにできるのは言葉の標本を作ることだけよ。あなたが教えてくれたみたいだね」

「ああ、間違いないね」

彼は笑ってみせた。わたしもつられて少しだけ笑った。

「原稿の進みはどうだい」

すべての香箱を組み立て終え、彼とわたしは、わたしが差し入れに持ってきたクッキーを食べながらふたりで他愛のないおしゃべりをしていた。

「順調よ。ピアノストも作家も仲直りをして、今ではもうすっかり仲良しに戻っちゃったわ。そろそろ終盤に差し掛かっている頃ね」

「じゃあ、そろそろプロポーズシーンに入るのかな」

「恋愛小説はいつだってハッピーエンドで終わるとは限らないのよ」

わたしたちは笑いあつた。窓から入る日差し of 気持ちのいい、よく晴れた日曜日の午後だった。

「ひとつ、また聞いてもいいかしら」

先日の彼の話をもと思ひ出し、わたしは彼に尋ねた。

「あなたの言う、標本箱に匂いはあるのかしら。棺の死臭のように」

彼は一瞬きよんとした表情をして、「もちろん」と笑つた。もうすっかり見慣れた彼の笑顔だった。

「それは、どんな匂い？」

「それはきつと、君がよく知っている匂いだと思うよ。僕にとつてのオルゴールみたい」

そう言うとき彼はクツキーを一枚取り出し、がりりと齧つた。

「もう、行くのね」

わたしは言つた。もうすっかり見慣れた作業室の扉の前にいた彼は静かに頷いた。

オルゴールが置かれていない店の中は、初めて入つたときよりもずっとひっそり静まり返つていた。経験したことのない静けさに、かつてたぐさんのオルゴールが置かれていた台も、木屑ひとつない作業室の作業台も、空っぽの陳列棚も、こころなしか戸惑つてゐるような感じがした。

「きみに、渡したいものがあるんだ」

そう言うとき彼は立ち上がつて、作業室の傍らのテーブルに置かれてゐるオルゴールを持ってきて、わたしに差し出した。

「きみに、プレゼント」

箱は、白色とピンク色の小さい花をあしらつたデザインだった。象嵌細工ではなく、ひとつひとつの花が細かく彫られ、綺麗に色が塗られていた。

「それは雛菊の花だよ。きみに似合うと思つて」

そう言うとき彼は、箱の裏に手をやり、キイ、キイとつまみを数回回した。彼の指がつまみをまわす瞬間が、わたしは一番好きだった。どこかで聴いたことがあるような、明るく、おどけたメロディーが流れ出した。しばらく二人でそのメロディーに耳を澄ませていたが、そのうちにだんだんゆっくりになつてきて、オルゴールは音を吐き出し終えた。

「素敵ね。ありがとう、大切にするわ」

わたしは両手でぎゅつとオルゴール箱を抱きしめた。彼は微笑み、ゆっくりとわたしを抱き締めた。なんとなく、いつも彼が扱つていたオルゴールたちはこんな気分だったのだろうか、手に持った箱の形を意識しながら、わたしは思つた。しばらく、わたしたちはそのままの状態、じつとしていた。オルゴールがすべてを見ていた。

その日の晩は雨が降つた。久しぶりの雨だった。

わたしは貰つたオルゴールのつまみを回し、蓋を開いてメロディーに耳を澄ませた。雨がしとしと降つてゐるせいか、昼間聞いた時とは別な印象をわたしに与えた。明るいメロディーだと感じたその旋律は、だんだんと緩慢になつていった。一粒一粒音がゆっくりとこぼれるたびに、雛菊の花弁が、一枚ずつ散つていく様を思い浮かべた。わたしはメロディーが終わつた後も、死んだ雛菊を悼むように、じつと目を閉じていた。雨音だけが聞こえた。

ふいに、わたしはオルゴールの曲名を聞きそびれたことに気がついた。でももうそんなことは気にならなかつた。蓋にあしらわれた雛菊の彫刻に指を這わせながら、再びつまみを回し、テーブルの上に置いた。テーブルの隅には、この間押し入れから取り出した、古ぼけたオルゴールが置きっぱなしになつていた。わたしは二つのオルゴールをテーブルの上に並べて置いた。

雨粒を含んだ夜の匂いは、ひんやりと冷たく湿つた空気と漂い、わたしの鼻

腔をしつとりと包み込んだ。それは、私のために彼がのこしてくれた、標本箱の匂いのように感じた。

わたしは、深く息を吸い込んだ。

短編小説部門 佳作

「秋待ち」 看護学部 原川 真緒

僕のおじいちゃんは研究者だ。天才は変人が多いというイメージがあるけれど、その言葉の通りの人だ。

退職前は大学の教授をしていたが、その大学では有名な変人教授だったようだ。

詳しく聞いたことはなかったけれど、「研究はその人間の個性そのものだ。

研究の中身を見ればどんな人間かがよく分かる。」というのを誰かが言っていた。

じゃあ、ドレッシングをかけるときに容器を振る回数とかける速さの合理的な数値を研究していたおじいちゃんは相当なのだろうと思った。

そして、天才によくありがちな、コミュニケーションが苦手な人種だった。人への警戒心が強いのか、よほど心を許した相手でなければ自分から話しかけたり、会話を繋げたりすることが出来なかった。質問をすればたっくさんの回答が返ってくるけれど、そこからの広がりが無い。

でも、孫である僕は特別、おじいちゃんから話しかけてくれることもあったし、笑顔を見せることが多かった。多かったといっても普通の祖父と孫にみられる程度だけれど、普段のおじいちゃんを見ている人が驚くほどだった。

おじいちゃんはひとつの研究に没頭すると、食事を摂ることも忘れて自宅の研究室にこもってしまう。だから、母に頼まれてよく僕が簡単な食事を届け

ていた。僕が食事を届ければ必ず中断して、一緒にご飯を食べてくれた。おじいちゃんにとってはかわいい孫なのだと思う。

そんなおじいちゃんが死んだ。

それは本当に突然のことだった。昔から高血圧だとは聞いていたけれど、昨日までいつも通りの生活を送っていた。夏休みだったから、昼間はおじいちゃんの研究室で宿題をしたり本を読んだりと適当な時間を過ごして、たまにおじいちゃんと話したりして、また明日も似たような日になるだろうと、当たり前のように思っていた。

夏休みはおじいちゃんの研究室で暇を潰すのが恒例だった。

死がこんなに突然訪れるものだなんて、高校生の僕には想像もできなかった。あまりにもあつけない。

変人だったけれど僕にとっては最高のおじいちゃんだった。おじいちゃんの研究の話聞くのは楽しかったし、退職してからも生き生きと研究に没頭するおじいちゃんがかっこよく見えた。

変人のおじいちゃんが、僕の前では良いおじいちゃんになろうとしてくれていたのもうれしかった。お互いの普段の話なんてしなかったけれど、研究室の中、二人の関係の中だけで、ひとつの世界が出来上がっていた。その心地よい世界を失った。

葬儀のことはよく覚えていない。ただ、僕は泣かなかった。おじいちゃんが

死んだ、ということが、言葉では分かっててもその意味が理解出来なかった。忙しそうにしている大人たち、悲しんでいる大人たちを他人事のように眺めていた。

次の日、気が付いたら家のベッドに寝ていて、「ああ、夢だったんだ。」と思った。

でも、昨日着た喪服が目に入って、目が覚めたのか覚めてないのかよく分からなくなる。

おじいちゃんの研究室に行った。今年の夏休みも例によって毎日のように通っていた。

これから同じような夏休みが二度と来ないのかと思うと、いつそうあの空間が居心地良いものだったように思う。

僕はおじいちゃんの話聞くのが好きだった。おじいちゃんはいろんなことを知っていて、どんな話でも新鮮でわくわくした。話をするときのおじいちゃんは好奇心旺盛な子供みたいで、身振り手振りで楽しそうに話す姿は、聞いている僕も自然と楽しくなった。

僕が興味津々に聞く姿をみて、『お前は私に似ているな。』とよく言っていた。僕は変人ではないので一応否定はしておいたけれど。

研究室に入ると、いつもついていた電気がついていない。中にあるものはそのままに物が散乱している。

そして、僕はやっと泣いた。

張りつめていた糸が切れて、拒絶していた現実が一気に流れ込んできた。部屋の中にあるものが、一昨日まではおじいちゃんの手に触れていたものが、ただのゴミのように見えた。

この部屋はそのままのはずなのに、僕の目にはまるで違う空間に見えた。すべてに意味をもたなくなるとき、本当に世界の終わりは訪れるのかもしれない。

長い間泣いていたと思う。

いつかおじいちゃんが言っていた。

『泣くのは良いことなんだ。』

唐突だったから、僕はおじいちゃんは何を言っているのかわからなかった。それに考えてみても、泣くことなんて、男としてかっこわるいと思っただし、それを抜きにしても良いことだとは思えなかった。

「おじいちゃんは泣いたりするの？」

『そりゃあこれだけ生きていればな。泣きたいときには泣くんのだ。』

『泣くっていうのは自己表現だ。言葉っていう難しくして回りくどいものを使わなくても、生理現象のひとつとして気持ちが見れる。それってすごく楽なことだと思わないか。』

今やっと、その意味が少し分かったような気がする。葬儀の時、僕はどうしたら良いのか分からなかった。おじいちゃんっ子だった僕のことを親は心配

しているようだった。

僕はおじいちゃんの死が上手く理解出来ていなかったからどんな反応をして良いのか分からなかったけれど、親は悲しんでいる僕を心配していたのではなく、何も感情を現さない僕を心配していたかもしれない。

泣いて、おじいちゃんの死が自分にとってこんなに大きいものだったのだと気付いたし、どこかで自分を甘やかしている感覚にもなった。

涙は僕の気持ちそのもののように感じた。
考えるよりもそのままに自分の気持ちに気付かされる。そして、どこかで泣いている自分を客観的に見て、気持ちを整理しているようにも思えた。

そうして流れる涙と自分の気持ちを受け入れ初めた一方で、自分の溜まっている感情に気づけないことが一番怖いのもかもしれないと思った。

涙が出るってことはまだ大丈夫。涙も出せないとき、出すことも忘れて自分の悲しみに気付けなかった時、心がひとりぼっちになってしまう。僕はさっきまでその状態だった。

気付いたら、窓からオレンジの光が差し込んでいた。

改めて部屋をみると、普段みえないものが見えてきた。僕が夏休みの自由研

究で作った物が、棚の上に並んでいる。部屋中が散らかっているから、何だかきれいに並べてあるそこだけが不思議な空気をまとっている。

牛乳パックで作った船、紙を重ね合わせて地球儀、一つひとつにそれを作ったときのおじいちゃんとの思い出がある。
それを大切にしてくれていることに、また少し涙が出た。

その横に木箱が置いてある。

きつとおじいちゃんが他の物に紛れないようにして置いてあるものだということは分かっていたけれど、見覚えがない。
手にとって開けてみると、紙切れとカメラが入っていた。

紙には、

タイムマシン取り扱い説明書

1. 電源を入れて行きたい時間を設定する
2. 設定した時間に撮影者が存在している(していた)場所の写真を撮る

注意・タイムスリップできる制限時間は3分

撮影者が存在している(していた)場所を撮影しなければ無効と書いてあった。

タイムマシン・・・信じられない。

そんなもの開発したのなら早く世に出して有名人になってノーベル賞でももらっておけば良かったはずだ。

おじいちゃんの単なるいたずらだ。

けれど、あのおじいちゃんだ。

天才は変人で短命と相場は決まっている。

本当に天才だったとしたら。

あるわけないとは思いつつも、試してみたくなった。

過去に戻るか、未来に行くか、よくある質問だけれど、今の僕は断然過去だ。戻って、おじいちゃんに「今までありがとう。」とか、「良いおじいちゃんだったよ」と伝えたい。

男子高校生で、普段から家族に、感謝の言葉とか家族への思いを日常的に口に出している人なんてなかなかいないだろう。

一昨日だって、最後の言葉は、「そろそろ夕飯だから帰るね。」だった。そんなのが最後なんて、気持ちに収まりが付かない。

そもそも、未来に行くために未来で自分が存在している場所を予測するなんて、おじいちゃんみたいに研究室に入り浸っている人間じゃなければほとんど無理に近い。もしかしたら、おじいちゃんは自分が使うために作って、世の中に出すつもりはなかったのかもしれない。

一昨日に時間を設定する。確かこのイスに座ってた。

半信半疑で始めたものの、少しドキドキする。

心の中でせーの、と言って思い切ってシャッターを押した。

シャッターオンにエコーがかかって、音がどこかに吸い込まれたような気がした。

世界が一瞬、白く眩しくなる。

気がつくといすに座っていた。

そして、見慣れていた後ろ姿。

書類の束と分厚い本が絶妙なバランスで積み重なった机に、頭を埋もれさせるようにして作業をしていた。

そうだ、大半の時間は何をやるわけでもなく、目にするのは背中を向けて机に向かっている姿だった。

一昨日まで見ていたのに、ものすごい奇跡のように感じる。というか、奇跡だ。

「ねえ、」

僕が声をかけると研究の途中でも手を止めて、必ず振り向いてくれた。

「何だ？」

本当にいつものおじいちゃんだった。

感動で心臓が内側から押し上げられて、喉が詰まる。次の言葉が上手く出てこない。

「いや・・・何か、おじいちゃんってすごいんだなって。」

変に思ったのか、おじいちゃんから「何か欲しいものがあるのか？」

と呑気な質問が返ってくる。

僕はそんな風に思われてしまう孫だったか、と少し反省をしてから、言葉の準備を何もしてこなかったことに気付く。こんなことなら、説明書に『本物なので気をつけて』とか書いておいて欲しい。

タイムマシンですって書いた紙切れだけじゃ信じたくても信じられない。そもそもいたずらじゃなくて本物なら何で今すぐ世間に公表しないのか・・・言いたいことはいろいろある。

けれど制限時間は3分だ。後悔のないように使いたい。

「...あのさ、何かこの場所って落ち着くんだよね。」

『そうか。けっこう散らかっているけどな。』

「まあ、そんなだけだよ、部屋っていうか、この空気間みたいな。」

『おいおい、この部屋はやらんぞ。』

らしくないことを言ってもなかなか伝わらない。というか本当に僕はそんな風に思われてしまう孫だったみたいだ。

「違う違う、いらぬし。おじいちゃんがいてくれて良かったってことだよ。」

『なんだ、急に。』

おじいちゃんの顔が緩む。こんな孫の言葉でも喜んでくれてるのか。

「まあ、たまには感謝の言葉も言ってみたくなるんだよ。」

『そうか・・・お前にそんなことを言われる日がくるとはなあ。』

しみじみと言うと、遠い目をして続けた。

『あいつが死んだとき、お前は5歳だったか。もうあれから10年も経つんだな。』

おばあちゃんは僕が5歳の時に死んでしまった。昭和の妻って感じで、手のかかるおじいちゃんの世話をずつとしてきていたそう。

『ずつと研究に没頭していた私にずつと付いてきてくれた。それなのに、私はろくに労いの言葉もかけてやれなかった。』

『ダメな夫だったよ。』

そう言って笑った。

あまり自分のことを話さないおじいちゃんが何で急にそんなことをいうのか。

過去に戻りたいならなら、おじいちゃんその発明でそうすれば良いじゃないか、そう言いたかった。けれど言ってしまうえば、おじいちゃんが明日死んでしまう話も避けられない。

あと数分でいなくなる人間がそんな無責任なことではできないと思った。

おじいちゃんが悲しむ顔を見たくないし、僕が現実に戻った後に悲しんでいる姿を想像するのも耐えられない。せいぜい、孫と祖父の最後の会話を、少しだけ意味のあるものにするのが精一杯だ。

もうすぐ3分、本当に最後だ。

何を言うべきなのか。

おじいちゃんとの思い出を振り返る。

孫として愛されていた思い出ばかりだ。変なおじいちゃんだったけれど、僕にとつては唯一無二で、最高のおじいちゃんだった。

「おじいちゃんの孫で良かったよ。」

これが、愛を与えてくれた人に対する一番の感謝の言葉だと思った。そして、僕の確かな思いだった。

おじいちゃんは何も言わずにうれしそうな顔をした。

その時の表情は忘れられない。表情は言葉より雄弁なことがある。うれしそうな目の奥に肯定と受容が存在していた。こんなに大人みたいな目をする人だったのか。

瞬間、世界が白くひかって、気がつくのと元の時間に引き戻されていた。

確かにタイムスリップをしていた。

信じられないけれど、確かに、一昨日と同じ時間を過ごした。そして、過去を変えた。

最後におじいちゃんに言いたいことが言えた。良かったと思う。

おじいちゃんは天国で前よりはマシな気分にいるだろうか。

何だか、言いたいこと言えて良かったと思う反面、何ともいえない虚無感を覚えた。

時間を戻して、あるはずのなかった時間を作った。

そのときのおじいちゃんの気持ちを想像すればするほど、自分がおじいちゃんの気持ちを操った感覚になった。

こんなのはただの自己満足に過ぎないのではないかと思った。もっと穏やかな気持ちになれるかと思っていたのに。

おじいちゃんはいうれしそうだった。タイムスリップしたのは、僕がその顔を見たかったからだ。そう、僕の気持ちを知って欲しかった。僕の言葉で喜んで欲しかった。

おじいちゃんのためのつもりが、気づいたら主語はいつも自分だった。おじいちゃんだって、最後だと分かたら言いたいことがあったかもしれない。

現に僕はおじいちゃんからの言葉を望まなかった。思い出が十分、おじいちゃんの愛を語っていたからだ。その反面、僕にはその愛を返せたという自信がなかった。自分の後悔が過去を変えたいと思った理由だった。

このカメラ型のタイムマシンをどうしようか。今の僕には、この発明が素晴らしいもの、世界を救うほどの価値のあるものには見えなかった。過去を変えられるということは幸せなことなのか。

タイムマシンと説明書を箱の中にしまう。

そこで気づいた、箱の中に封筒が入っている。

これは最初に見たときには入っていなかった。

僕が過去を変えたことで未来が変わった？

おじいちゃんの字だ。

お前がこの手紙を見ているということは、きっと私はきつとこの世にいないのだろう。

よくこの部屋に来ていたお前が、急に私に、らしくもない感謝の言葉を言い始めたとき、すぐに分かった。最後の言葉を言いに来たのだと。

何故なら、私も同じことをした人間だからだ。やっぱり私とおまえはよく似ている。

あいつが死んでしまっって、もっと愛のある言葉をかけていれば良かった死ぬほど後悔した。

そして、どれだけ長い時間がかかったとしても、絶対にタイムマシンを作ると決めた。

ひとつの発明にこんなに時間を費やすのは初めてだった。

完成したのは最近だ。そして、望んでいた通り、私はあいつに会ってきた。会って感謝のきもちを伝えられて良かったと思う。面白がられるばかりだったけどな。

だが、現実に戻って来て、今までずっと望んできたことだったが、単なるひとりよがりだったように感じたよ。

あいつがどんな気持ちを抱えて死んでいったのかなんて、私の想像でしかない。

ただ私は、あいつに感謝の言葉も伝えないままに別れて、その後悔を抱えて生きていくのが辛かったんだ。

こんなに長い時間をかけて作ったものなのに、何だか意味のない事をずっとしてきたような気持ちになった。他の誰かに自慢できるようなものではない

と思った。

だから、自分で納得が出来るまでこの箱にしまっておくことにした。

だが、おまえに私と同じ事をさせているということは、その箱を開ける前に私はいなくなってしまうのだろう。

おまえに言われたこと、うれしかったよ。だが一番うれしいのは、いつも何もなくてもお前がこの研究室に足を運んでくる、その思い出があることだ。言葉なんて言ってしまうれば簡単だが、本当に心に残るのは今まで積み重ねてきた思い出だ。

時間を戻して得た時間もその大切な思い出の一つになった。だがこれまでの思い出の大きさがあって十分なものだ。幸せな時間だったよ。おまえが後悔をすることは何もない。

私はあいつが死んでからずっと後悔をしてきた。

だが、今になってみればその後悔があったからこそ、ずっと強くあいつのことを思っって生きてきたように思う。

後悔なんてマイナスの感情でしかないと思っていたが、それだって愛があったことだ。

過去はやり直せない。だからこそ後悔しないように、一つひとつの思い出を大切にしなければならぬ。

タイムマシンなんてつくるものではなかったな。

ただ、あいつが死んでこれを作っている間、私は愛のために生きていた。それも幸せなことだったのかもしれない、今となっては思うよ。

会いに来てくれてありがとう。

僕は何だかあつけにとられてしまった。

おじいちゃんがそんなことを日々考えて生きてきたこと、僕に後悔を残さないように言葉を残してくれたこと、一昨日のおじいちゃんはすべてに気がついていたということ、すべて思いもしなかった。

驚きと恥ずかしさが渦を巻いて、その上にうれしいのか悲しいのかよく分からない感情だ。その感情にかき回されているうちに、脳みそと目のあたりに血液が集まってきた。

容量が足りなくなった分は、涙になって溢れた。

そのとき、泣くことは良いことだと言ったおじいちゃんの言葉に続きがあったことを思い出した。

『でもな、泣くことが自分を楽にしようと思つた今、自分が泣いて良いのかと思つこともあるんだよ。』

あの言葉はおばあちゃんに対する後悔だったのだろうか。

中学生の夏休みに家族で川に遊びに行つたことがあった。

普段はほとんど外に出ないおじいちゃんも僕が誘えば一緒に来た。

親がバーベキューの準備をしている間、僕はおじいちゃんと川辺を散策していた。

川は透き通っていて、浅瀬では小さな魚が泳いでいるのが分かった。

日差しがアスファルトを鉄板のようにした住宅地とは違って、山がすぐ近くにある川辺は、空気がひんやりしていて気持ちよかった。

半袖のシャツを着たおじいちゃんは、日にさらしたことがないような腕をしていた。

『たまには自然もいいよなあ。』

半袖が似合わないおじいちゃんは、夏の日差しとキラキラした緑に眩しそうな目をしていた。

「もう少し外に出て健康的な生活をした方がいいんじゃない。」

『私はインドア派だからな。』

そういうレベルではないと思うけど、とは言わないでおいた。

「夏は熱いから、水中で暮らせる発明をして欲しいな。」

『私はそのあたりはエアコンで間に合つてあるよ。それに泳げないしな。』

「僕は自然に触れながら涼しく暮らしたいよ。泳ぐのも好き。」

『私はインドア派だからな。』

「言い訳が同じだよ。」

そう言つてすこし笑つた。

『でも』

『水の中の景色も良いものかもしれないな。』

僕はその時、本当におじいちゃんはその発明をしてしまうかもしれないと思
った。

僕は、おじいちゃんが夢見たものはどんなにあり得ないことでも出来ると信
じていた。

天才だから、というよりは、おじいちゃんのキラキラした目がそう思わせた。
おじいちゃんは夢を語る時、自信があると言うよりは、決意を感じさせる
輝いた目をしていた。そして行動に移したときはとてもひたむきだった。

周りが見えなくなることはあったけれど、その不器用な分だけ、夢に突き進
むパワーがあった。

僕はそのパワーを信じていたし、今思えば、そこまでひたむきになれる姿に
憧れを感じていた。

遠くで僕たちを呼ぶ声が聞こえた。

バーベキューの準備が出来たみたいだ。

おじいちゃんは何か考えているようで聞こえていない。

「おじいちゃん、行くよ。」と言うと

『私は水には入らないぞ。』と見当違いな事を言う。

「泳ごうなんて言っていないし泳げるとも思っていないよ。お母さんたちが呼ん
でる。」

『そうだったか。』

そう言って、踵を返す。

「おじいちゃんは危ないから単独行動禁止ね。ちゃんと僕についてきてよ。」

『そうやって川遊びに連れていくつもりか?』

少しいたずらっぽくそう言ったおじいちゃんは、全く自覚がないようだった。

おじいちゃんに会いたくなかった。

ありがとう、やっぱり最高なおじいちゃんだったよと伝えたい。

外が暗くなってきた、それに比例して部屋の中も薄暗くなり、置いてある物
が色を無くし始めている。

外に出ると、少し涼しくなった空気と空の向こうに見える鮮やかさに目が覚
めた。

柔らかな風が気持ち良かった。

私は清水港での通訳ボランティアに、イギリス留学後から参加している。今ではクルーズ船の寄港予定表を常に持ち歩くまでになったが、今考えてみても、始めたきっかけはとても単純なものだった。

私は「羽衣つたえ隊」の活動を行っている。

清水区観光ボランティアガイドの会にも参加している。

そのほかにも取り組んでいることがあるし、幼いころからずっと異文化理解に関わってきたと思っている。

そんな、今の自分という結果を作っているすべての原因は、人との出会いがきっかけだった。

留学先のイギリスから間もなく帰国するという頃、部活（IFC）の先輩が通訳ボランティアの募集をしたのがきっかけで、今がある。当時、通訳なんてとてもできないと思いつつ、先輩が繰り返し連絡していたのを見て、「誰もやらないなら…帰国後も英語を使うチャンスになるし…」、こんな気持ちで申し込んだ。それにも関わらず、今では私が「言葉なんてそんなにできなくてもいいから！私の中国語なんて10フレーズもないんだから！」と、必死で部員、友人に呼びかけるようになっていた。

私がこんなに清水港でのボランティアに積極的に取り組んでいるのには理由がある。実は、初めに先輩の紹介で参加したボランティアは企業の依頼によるもので、現在私が行っているものとは異なる。清水港客船誘致委員会

ボランティアが来ているビブスは、その時の私には特別に見えた。最初に清水港で通訳を行ったのは、帰国し3年生になる前の春休みだった。

私は依頼企業のために、クルーズ客に声をかけ、Wi-Fiの接続方法や、アプリのインストールと起動の仕方などを伝える。そのアプリは便利なもので、旅行に役立つものであったが、お客様が訪ねる目的地までの行き方などに私は答えることができなかった。英語を使っている相手、相手の意図が理解できても、私はお客様の要望に答えられなかった。

後日、私は他のボランティアはどんなことをしているのか、お客様は何を求めているのか、そんなことが知りたくて、クルーズ船が寄港する日、一人で港へ行ってみた。

すると、観光案内所のテントで客船誘致委員会のビブスを着たおじいさんに話しかけられた。私はどんなところに行きたいお客様が多いのか知りたかったが、静岡出身でない私にはわからない地名が多く、話について行けなくなつた。大学のために静岡に来て、留学前に2年間市内に住んでいたのに、私は地域の歴史や文化を何も学んでこなかった。これでは旅行者のために通訳ができるわけがないと思いつつ、説明の口調が強くなるおじいさんの前で、なんだか怒られているような気分になった。

だが、私はこのボランティアをやりたい、このおじいさんから清水のことを学びたい、と思った。それは、留学中に自分が自分の持っている文化を満足に紹介できないことを常に悔しく思っていたからかもしれない。イギリスにいる間ずっと、自分がうまく紹介できないのは、英語の問題というよりも、

自分の文化について、深く考えて来なかったからだ、と自覚していたからかもしれない。

元をたどれば、私がイギリスに留学したきっかけは、中学2年生の夏に3週間、オーストラリアでホームステイしたことだ。この時に、自分の英語が通じないのは、言葉ではなく、考え方がそもそも異なるがゆえに、同じ言語を使っても表現が違ってしまふのだと実感した。それからずっと、大学生になつたら、英語が生まれたイギリスで、自分と同世代の人と暮らし、その言葉が作られた文化に触れ、母語話者の思考法を体得し、英語を話そうと考えていた。

それなのに、私は自分の身の回りのことを処理しきれていなかった。

これまでに訪れた国々で、友人や現地地知り合った人が私を案内してくれたことを当たり前だと思っていたが、私にはそれができなかった。みんながしてくれたように私も観光案内をしたいと思っていたのだが、遠い夢のように感じた。

留学中に、将来は日本を訪れる人の役に立てる職業に就こうと考えた私にとって、おじいさんの立ち話は、ショック以外の何物でもなかった。英語は少し話せるようになったけれど、神社や季節の行事、趣味のお菓子作りなど、英語で紹介できることも増えたけれど、それでもまだまだ人の役に立てないのだと思ひ知らされた。

その後、私は清水港での通訳ボランティアの募集を広報誌から見つけ、応募した。最初に担当した売店での通訳は、お茶の紹介には苦戦したが、何とか

補助にはなった。しかし、私がこのボランティアに参加した動機を知った、例のおじいさんに勧められ、また別の機会には、観光案内所での通訳を行うことになった。

私はどんなところにお客様が行きたいのかを知ることができると思い、とてもうれしかった。だが、必要な仕事はただお客様と会話して、行き先を聞くだけではない。私が、行き方を説明する間、何度も、観光協会の方に、日本語で行き方を訪ねなければならなかった。それは「通訳」の仕事ではあつたかもしれないが、「地元の通訳」さんたちとは大きく異なる。私には知識が足りない。おすすめもできなければ、聞かれた場所までも自分一人では案内しきれない。

これが私が現在行っているボランティアの始まりであつた。このようなスタートであつたが、よかつたことも多くある。

まず、お客様は私の英語を理解してくれ、コミュニケーションは楽しめた。そして、他のボランティアさんやスタッフの方は親切であつた。だからこそ、私はクルーズ船が寄港するたびに、前回よりはうまくやろう、と前向きに取り組むことができた。少しずつスムーズに対応できるようになり、活動自体が楽しかった。

私が「羽衣つたえ隊」に参加したのも、港でお客様を案内していたことがきっかけだった。西洋人のおばあさんは、三保の松原へ行きかけた。私は杖をついているおばあさんに行き方を説明した。砂浜まで直接行けるバスはない。タクシーを使わないのであれば、路線バスで行き、海岸まで歩く方法を案内するしかない。私の説明が終わるとおばあさんは歩いてどこかへ行った

が、しばらくして、そのおばあさんがすぐそばのマリンターミナル内のベンチで座っているのを見つけた。おばあさんは三保へ行きたくても、行くことができない。それはこのおばあさんが初めてのお客様ではなかった。案内しても、方法を知って、諦めるお客様はいるが、このように出航までただ待つだけの姿にとっても悲しく感じた。

私ができるようになっていたのはまだ道案内程度だったけれど、お客様に清水ならではの思い出を作ってもらいたいと思う気持ちは強かった。その文化に触れたいと思っていた人のニーズに応えたいと思い、私は「羽衣つたえ隊」活動を行う、鈴木さやか先生を訪ね、絵本の読み聞かせを港で行ってもらえないか依頼した。とても急な話であったが、先生が対応してくだり、市の方が協力してくださり、英語での「羽衣」読み聞かせは実現した。この読み聞かせでは、羽衣つたえ隊のメンバーではなく、私が友人と読み聞かせることになった。

読み聞かせに来てくれたお客様は多くなかったが、見に来てくれた方からはよい感想を聞かせてもらうことができた。私が大学生でボランティアをしていることを知る他の地元のボランティアさんたちも、このような企画を行うことにとっても喜んでくれていた。私はもつと勉強しようと羽衣つたえ隊に加わった。通訳するだけでなく、自ら提供できる観光情報を持つてることが大切だとわかり、清水区観光ボランティアガイドの会にも参加していった。

港でのボランティアではお客様のためにできることが、たくさんあるのではないかと考えるようになった。宣伝もあまり行われておらず、ボランティアやスタッフなど現場でお客様と接する人の間での情報共有も不十分だ。このボランティアに参加している人の多くが、お客様のためになりたいと思って

いる。それにも関わらず、アンケートを取ったり、パンフレットを充実させたり、すぐに改善できそうなことがいつもそのままになっていた。

今年の7月、香港の会社との契約により、清水港に定期就航するクルーズ船ができた。最初の寄港では、みんなが喜んで、報道陣や地元のお客様も集まって、賑わっているようだった。しかし、肝心のクルーズ客は港周辺にいなかった。ほぼ全員が、市街の大型商業施設行きのバスに吸い込まれていたのだ。

これは、いつも港でボランティアや仕事をしている人、そして地域の人にとって衝撃的だった。さらに、このことは新聞にも取り上げられてしまった。この事態の原因は何か―清水はそれほど中華系のお客様に魅力がないのか。

問題の原因はとても簡単なものだった。クルーズ代金にバス代が含まれていたのだ。ツアーバスでの移動が別料金に変更になると、事態は多少改善された。だが、問題はまだまだあった。

私たちは客船誘致と書かれたビブスを着ている。お客様が増えることはうれしいことであるはずだ。しかし、受け入れ態勢は整っていなかった。

中国語で対応できるボランティアの数は、英語の場合と比べてかなり少ない。それに加えて、お客様のニーズも今までのクルーズ客と異なり、観光案内所でも対応に苦労した。私は中国語がほとんど話せず、お客様も英語ではやり取りできず、私は自分から声をかけられなくなってしまった。中国語の資料も不足していたのだ。

それでも英語で話しかけてくれる若いクルーズ客やクルーがいた。私はお客様のために何かできるはずだと思い、地図を渡して「私たちがいるのはここです」と、中国語で伝えてみた。それから少しずつ、清水港でしか役に立たないかもしれないようなフレーズを覚えていった。お客様の言っていることがわからなくても、ただ理解できる単語が出るまで聞き、「徒歩5分」、「右に曲がる」、「バスで」など、単語で案内した。そのうちに、必要最低限の語彙でも対応できるとわかり、話せもしないのに自信がついた。他の英語ボランティアさんが減っていくのは残念だったが、大切なはもてなしたいと思う気持ちだと思い、毎週のように香港船でもボランティアに参加した。

私はこのボランティアをしながら、様々な課題に気付くようになった。お客様のニーズを把握できておらず、自ら提供できるものも揃っていないのではと感じた。去年の夏にベトナムのダナン市観光促進センターで行ったインターンシップのことを思い出した。ダナン市と清水は似ていると思った。

ダナン市には空港があり、世界遺産の街ホイアンへの玄関口として、旅行者は来ている。しかし、市内に滞在する客は少なく、ただ利用されているという状態だった。清水港も同じだ。富士山があるから寄港地になっているが、清水としてPRされているものは多くない。ダナン市観光促進センターで提供している情報は、現地が見せたいものであり、お客様が求めているものとはずれていることもあった。これはマーケティング調査をほぼ行っていない清水港でも同じだと思った。

私は、清水や静岡出身でないからこそ、この土地ならではの魅力があると感じている。問題はそれは目玉としてPRするかどうかだ。認知されていないければ、お客様は訪れるはずがない。

こんなことばかり考えていると、できることのほうが多いと感じてくる。やらなかっただけで、やってみることは簡単ではないかと思えてならない。

私はボランティアとして、お客様に満足してもらおう、また来たいと思ってもらおう、それだけがやりがいであり、目標であった。だからこそ、絵本の読み聞かせや、ちよつとした飾りつけを行ってきた。利益とは関係ない。ついこの前も、お客様に対するアンケート実施しようというのを知り、完成が待ちきれないので、ノートに感想を書いてもらおうように頼んでみた。すると、今まで中国語だからコミュニケーションが難しいと思っていたお客様が立ち止まって書いてくれている間、他のボランティアやスタッフとお客様との間で会話が生まれた。3か月間寄港していた船のお客様の声を、初めて聞くことができたと感じた。しかも、とても簡単であった。

私は、今の自分がやっていることはそれぞれ、過去とつながっていると考えている。やってみるととても簡単だったけれど、問題に直面するまでは思いつかなかったことばかりだ。だから、それぞれの結果には原因があり、目標に向かって取り組んだから、今の結果に結びついていると思う。

清水港でのボランティアを通して、様々な問題を見つけたことができた。人によって問題であると捉えるとも異なるため、別に自分がやったことが大きなことだとは考えていない。今まで取り組んだことは自分一人では成しえなかったことであり、誰かに頼れるのだということも、経験から学んだことだ。今起こっていることを、何かの結果だと考え、その原因を見ることで、問題がわかる。これからお客様を満足させたい、前回よりもよいサービスを提供したい、この目標を叶え続けるために、努力していきたい。

短歌部門

最優秀賞 『秋と君』 国際関係学部 澤野 華世子

くれなるの 外套を纏う 君の背を
なつかしく思ふ 冬恋しさに

優秀賞 『懐古』 薬学部 田部 美紗子

同窓会の 帰路はいつかの 通学路
視界の限り 間違い探し

優秀賞 『内定ゲットだぜ』 薬食生命科学総合学府 小林 勇太

「蟬取るぞ」 網持ち 駆け行く 子供たち
気持ちは同じと 面接へ行く

佳作 『群青の日』 薬学部 田部 美紗子

青春と 青春以外が 僕たちと
世界を隔てていた あの日の夜

佳作 『木曜午前零時』 薬学部 青柳 有紀

赤レンガ ラボの光が キラキラと
日付の変わる 夜半過ぎかな

佳作 『健康長寿の秘訣』 国際関係学部 山本 奈央

しんねんの ずっと変わらぬ おみくじは
かぞくと共に ちやばしらを見る

努力賞 『頑張る』 薬食生命科学総合学府 山田 朋宏

明日から 頑張るでなく 今日だけを
頑張ることを 続けていこう

川柳部門

最優秀賞 『成績評価平均値』 国際関係学部 山本 奈央

GPA 理想と現実 GPAあり

優秀賞 『就職面接』 薬学部 工藤 悠翔

開花した！嘘つく才能 人事の前

優秀賞 『就活』 薬食生命科学総合学府 山田 朋宏

御社をねいつか弊社と言いたいな

佳作 『インスタ女子』 薬食生命科学総合学府 進藤 卓弥

この角度 写真撮るのも一苦勞

佳作 『学校生活』 薬学部 石橋 未来

暇だなあ 実験マウスに話しかけ

佳作 『坂登る』 薬学部 長谷 怜奈

6年間 雨やら汗やらさかのぼる

努力賞 『友達の家』 薬食生命科学総合学府 小林 勇太
おしゃれより ウオシユレットが羨ましい

